

# ジェイムズ・ステュアートの方法論

## —ジェイムズ・ステュアート格言集試論1—

坂本 幹雄

「格言はわれわれの観念の拡充を容易にするものである。」(Steuart (1995) I 78)<sup>1)</sup>

1. 正真正銘の経済学の創始者
2. ステュアート格言集の構想
3. ステュアートの科学方法論
4. ステュアートの心性
5. ステュアートの格言観
6. いわゆる格言についての若干の考察

### 1. 正真正銘の経済学の創始者

ウィリアム・ペティ、ジョン・ロック、リチャード・カンティロン、デイヴィッド・ヒューム、フランソワ・ケネー、ジェイムズ・ステュアートそしてアダム・スミス等、17・18世紀の経済学の創始者群像がある。経済学史上、みな有名な人物であるが、しかしその中で『国富論』の著者アダム・スミス1人が「経済学の父」としてその名をほしいままにしている感がある。高等学校までの社会や歴史の教科書の中では、経済学の創始者はスミス1人である。このような状態は変えるべきとの問題意識から拙著の教科書『経済学史』(坂本(2002))の改訂を行なった。

18世紀の経済学の創始者群像の中で『経済の原理』を著したジェイムズ・ステュアートこそはスミスと同時代のもう1人の経済学の創始者である。彼らの著作の中でステュアートの『経済の原理』は一寸見ただけでも最も分厚い書物である。スミスの『国富論』をも凌ぐ。もちろんその学説の規模だけではなく内容の点から見て、ステュアートに正当な位置づけをとの方針から教科書の内容の充実を図った。スミス以前の重商主義経済学の1節としてではなく、スミスと同等に取り扱ってみた。スミスと並ぶ同時代の巨匠として1章を追加したのである(坂本(2009))。これはステュアートを重商主義の完成者・最高峰であるにしても所詮は重商主義者と見なす立場からは行き過ぎとされるかも知れない。一方、貨幣的経済学の先駆者であり、かつ経済的自由主義者としてスミスに近づけて解釈する立場がある<sup>2)</sup>。こうした立場からはスミスと並ぶ経済学の巨匠とするステュアートの位置づけは正当化

されるはずである。

小林昇氏(小林(1993) i-iii)は、このステュアートの『経済の原理』について経済学の理論的・学史的意義の観点から、その特徴を7点にわたって大略次のようにまとめている。

①イギリスにおける最初の Principles of Political Economy というタイトルの古典であり、内容の統一と整序の点でその名に値する著作である。

②18年にわたる知的労働の成果であり、それにふさわしい完結自足の大作である。

③理論の体系化への強い意図と内容の濃さ。

④「理論・歴史・政策の諸領域を統合した真の意味での経済学体系」である。

⑤「貨幣的経済理論とそこから導出される金融・財政諸政策の巨大かつ正統的な源泉である」。

⑥「従来のいわゆる重商主義の諸学説が開拓したあらゆる理論的契機を包摂するとともに、それらの重厚かつ前進的な体系化」を成し遂げ、古典派の資本主義分析に越えられつつも、古典派の貨幣的要因の無視という欠陥を埋め、「顧みられるべき諸古典の最右翼に位置する高峰」である。

⑦単なる重商主義の最後の体系化ではなく「資本の本源的蓄積過程のアン・ジビな体系化」である。

このように学史の大家が見事にまとめられているように『経済の原理』は、事実上、内容的・体系的完成度の点で経済学というタイトルを持つにふさわしい最初の著作であり、歴史・理論・政策が一体となった壮大なスケールをもち、スミス『国富論』と双璧をなす堂々たる18世紀経済学の古典である。本稿はこのようなステュアート解釈の立場をとる。

スミスの『国富論』は、古典として経済学者以外にも広く読書の対象となっている。邦訳は抄訳などを含めると10種類以上はある<sup>3)</sup>。しかしステュアートの『経済の原理』はそうではない。全訳が1996年ようやく完結した。

スミス、そのいわゆる「人と作品」は普及している。スミスの伝記はいくつも新書類がある。しかしステュアートにはまったくない。ステュアートの伝記<sup>4)</sup>がスミスのような状態で普及することがあるだろうか。そうなってしかるべきであると思うが、目下のところその見通しはあいかわらず期待できる状態ではない。一方のスミスは『国富論』だけではなく、『道徳感情論』もよく知られるようになってきた。ステュアートにも『経済の原理』以外の著作はあるが、『経済の原理』ですら知られていないのだから、もちろん知られているはずもない。竹本洋氏(竹本(1993) 845, 847)は、「『経済の原理』は「不幸な古典」であり、「わが国においても一部の経済学史家を除けば、『原理』への認識と評価は『国富論』へのそれに比べれば無きに等しい」と述べている。このように現状は依然としてまだまだ「不幸な」状態にある。

## 2. ステュアート格言集の構想

スミスの『国富論』は、広く社会科学の古典・一般的読書の古典として親しまれてきた。人間と社会について広く深い知見に満ちている。史書としても面白い。ステュアートの『経済の原理』も『国富論』と同様に広く読まれてしかるべき古典ではないだろうか。本稿はこのような観点から社会科学の古典・一般的読書の古典として『経済の原理』を再構成し、その全体像を描くというには及ばないだろうが、その特徴をまとめてみたい。これが本稿の意図するところである。

まず作業仮説的に項目を分類して、順次紹介していくことにしたい。古典の読書として、特に「100の名言」とかにまとめられるわけでもないが、それでもできるだけいわゆる名言集・箴言集・格言集に向かっての編成を試みたい。すなわち『経済の原理』における経済のみならず学問・人間・社会・政治等に関する諸言説・思想を編成してみたい。もう少し具体的には、まず経済に関しては、サブタイトルにあるように「人口、農業、商業、工業、貨幣、鑄貨、利子、流通、銀行、為替、公信用ならびに租税について考察する」と包括的であるが、利己心と公共心の議論・自由論・平等論・平和論・改革論・為政者論・義務と行為の議論・法律論・風土論等々の観点からまとめてみたい。ステュアートの重要な文章を完全に網羅していく構想であるが、現実的にはそうもいかないだろう。しかし以下かなり網羅的ではある。さて第1回として今回はまずステュアートの社会科学方法論・経済学方法論に関してまとめてみたい。

ひとまず文脈に依存せずに古典の教養を求めるとか古典に親しむという読者が立ち止まって首肯・納得・注視できる文章を抽出していくことにしたい。たとえば平井俊顕氏の『ケインズ100の名言』（平井（2007））という著作がある。これは、ケインズの全著作を用いてケインズの人物像を描写しようとした著作である。ステュアートのそれができるほうが、いま筆者にその力はない。ひとまず伝記的アプローチは取らない。本稿はゲーテ、トルストイ、ラッセル等の格言集といった巨匠の名言集的なものを志向している。したがって1つの文学的アプローチといってもよい。ステュアートの『経済の原理』のケースでそれを考えて見たいのである。なお文脈に依存せずといってしまうと、たいへん気にかかる点であり、今回合わせて格言・箴言といわれるものの性質について若干の考察を加え、本稿のアプローチの制約を画したい。

## 3. ステュアートの科学方法論

今回はまずステュアートの方法論から始めることにしたい<sup>5)</sup>。新科学誕生の方法は興味津々と思うからである<sup>6)</sup>。しかしステュアートの方法論といってもその全体像を描こうというのではない。前述のような意図から本稿はいきおいミクロ的アプローチとならざるをえない。ステュアートの方法論全体としては、たとえば発生史

的・いわゆる18世紀の推測的歴史の手法によって全体が構成されている次第や全体の連関の考察には焦点があたらない。これが本稿のアプローチによるステュアート解読の限界である。それに代わって、『経済の原理』を片言隻語に至るまでとはいかないが、そのような意欲をもって古典として尊重し抽出してみようとするものである。

さてそれでは具体的には、科学・理論・原理の演繹・アート・経験主義・真理・相対主義・観念・言語・レトリック等の順にまとめていくことにしよう。

### 政策科学

ステュアートのいう科学とは政策科学である。「自由な諸国民の国内政策の科学」とサブタイトルにあるように、また「それは国内政策にかかわる錯綜とした利害関係を諸々の原理に還元し、それを正式な科学にまとめあげようとしたものである」(I v) というように、ステュアートは政策科学としての経済学の構築という明確な意図を提示している。その意図は「ステイツマンの行動の指針となるべき諸原理を演繹」(III 460) することである。

ステュアートのポリティカル・エコノミー<sup>7)</sup> は明確に理論科学と実践科学とからなる。念のためにいえば、この研究路線は、経済学史上、自明なものではなく、古典派が支配的な世界では優勢となったわけではない。ステュアート経済学のこの特質は、アートの概念によく表われている。その前にまず理論について、次に原理の演繹についてまとめ、その後でそのアートについて見ることにしよう。

### 理論の力

以下に見るようにステュアートは、理論の性質・意義・役割・効用・限界等について説いている。ステュアートにとって理論は「一般的な諸原理に基づいているので、どのような個別的事例の組み合わせに対しても、等しく妥当するにちがいない」(II 424) ものである。これは理論の一般的妥当性の謂いであろう。この理論の実践への効用が次のように説かれている。

「政治的諸問題における理論の効用は、ただ単にあらゆる濫用を除去するための諸方策を発見することだけではない。理論は同時に、容易に矯正されえない不都合を軽減することに寄与しなければならない。」(II 291)

あるいは理論の効用は次の点にある。

「理論はそうしなければ打ち勝ち難いと判断されるような諸困難を、実際にあって回避することをわれわれに教える。」(IV 315)

さらに理論の効用と限界について、次のように説いて慎重さを強調している。

「ロンドンのとびきり腕利きの職人が時計を作ったとしても、それが試用されるまでは、それが申し分のないものであるかどうか、彼には確信が持てない。試しに使うことで、彼の理論は、その装置の欠陥と不規則性とをくまなく発見するのに役立つようになる。政治的事象についても、まさに同じである。理論の力は万全の計画をたてる上では十分な資格はないが、しかし予知されえな

かった多くの誤りを見つけるのには有効である。したがってどんな理論でも包括的に作られるほど、それだけこの目的に合致したものになる。しかし、理論の原理が複雑になればなるほど、実際の適用にあたって、その効力に対する信頼はそれだけ少なくなる、ということには注意しておいてよい。」(Ⅲ 15)

したがって「複雑な理論を簡潔にするのに資するものは、いかなることでも思考を大いに助ける」(Ⅲ 1)し、その泥沼のような複雑さから本来の単純さに引き戻すこと(Ⅳ 2)が肝要である。

### 原理の演繹

「それは国内政策にかかわる錯綜とした利害関係を諸々の原理に還元し、それを正式な科学にまとめあげようとしたものである」というようにステュアートの基本的な方法は、原理の演繹である。ステュアートは「この著作の本質は原理の演繹にあるのであって、制度を寄せ集めることが目的ではない」(Ⅰ x)という。実際この大著はさまざまな制度に言及している。制度が寄せ集まっているがゆえにこのように強調するところとなったのだろうか。それはともかくとして、かくしてこの原理の演繹は、「そこで私は、推論の過程で得られる機会を捉え、叙述を進めながら、あらゆる原理をそれが関係をもちうるすべての分野の研究と関連づけるように努めた」(Ⅰ xxi)というように壮大な体系となって結実した。

「私の推論の全連鎖を構成する骨の折れる演繹を成し遂げる」(Ⅰ xi)、「私の主たる目的は真理を発見することであり、また私がいつ踏みはずすかもしれぬ真理の連鎖の1つ1つの環を読者に把握してもらうことである」(Ⅰ 6)。これがステュアートの目指すものである。

そして原理の推論に際しての用意周到さ・留意すべき点・限定に関して以下のように説かれている。

「実務から離れて、観察と反省とによってこの科学の諸原理を引き出す理論家は、一般に承認されている見解が特定の国々について検討してみてもどんなに合理的であっても、それを支持しようとする一切の先入観念をできるだけふり捨てなければならない。」(Ⅰ 4)

あるいは「どんな仮説でも、前提された諸事情と厳密に関係させて考えなければならない」(Ⅰ 7)、「すべての原理を定立する場合の方法に細心の注意を払うこと」(Ⅳ 176)等が要請されることである。

原理の適用の議論は、ステュアートが以下のようにもっとも強調している点である。

「誤った適用を防ぎ、できるだけ抽象を避けるために、どのような原理を説明するにあたってもしばしば実例を挙げる。」(Ⅰ 7)

「私の意図は、諸々の原理を明確に推論することに専念し、そしてできるだけ抽象を避けるために、その原理をありふれた事例に簡単に適用してみることにある。」(Ⅰ 5-6)

「私はすべて相対的で互いに依存し合っている諸原理を吟味しようと考えている。

これらの原理を、それによって影響をこうむる対象に適用しないことには、明確に論ずることは不可能である。しかも同一の原理が私の主題のいくつかの分野に広くその影響を及ぼすのであるから、もっぱら原理だけを念頭においている読者は、その原理の種々の適用が生む大きな多様性に気づかないだろう。」(I 217-218)

そしてこのような適用に際しては個別状況を見究めていかなければならない。

### 個別状況の考察

ステューアートの研究方法論の特質・最大の強調はこの個別状況の徹底的追究である。原理・原則の安易な適用・機械的適用は典型的な誤りへの道である。『経済の原理』全編にわたってこの点に関して以下のように多くの注意を喚起している。

「政治学のいずれの分野の原理を演繹する時も、その開始にあたってとりわけ重要なのは、あらゆるものを個別に考察すること、もろもろの状況の複雑な組み合わせを避けること、そして当該の一般原理の作用と偶然的状況の影響とを区別する方法を会得することである。偶然的状況は個別問題の解決を、目下関心を払っている原理とは別の原理にゆだねさせるものである。諸状況をむやみに組み合わせたり複雑にしたりすると、状況の全体も、またその個々の状況も、たえず様々な原理の影響にさらされるだろう。」(III 60-61)

「この主題について、個々の論点において誤りに陥る危険が大きいのは、われわれがそれをあまりにも限定された観点から見て、一般的な原則をほとんど無効にしてしまう付帯状況の作用に留意しないことから生ずるのである。」(I xii)

「状況を検討しないでただ事実だけを検討しただけでは、正しい結論は引き出せない。」(I 100)

「その諸状況に注目しないで結論を引き出そうとすると、どんなに完璧な演繹原理でもまったくの妄想になりうる。」(II 339)

「諸状況の変化が、あらゆる政治的問題に何と大きな影響をあたえるものだろうか!」(II 374)

「政治的諸問題におけるあらゆる決定は状況に左右される。状況に応じて諸原理を適用することは、ステイツマンの仕事である。」(II 388)

「諸原理の個々の事例への適用にあたっては、設定された事例に、想定した諸状況の正確な組み合わせと矛盾する未知の諸状況は存在しないという仮定にたつて、絶えずそれを進めねばならない。」(III 61-62)

そもそも人間社会の関係ほど複雑なものはない。この関係に次のように注意を喚起している。

「あらゆる行動、さらにいえばあらゆる事物は、結局のところ関係によってのみ良くなり悪くなる。社会について考えてみる場合、関係というもののほど複雑なものはないし、また、このような関係と絡み合い混じり合っている場合に真理を発見することほど難しいものはない。」(I 8)

そしてわれわれはこの社会の錯綜とした関係を解きほぐさねばならない。

「この主題を取り扱う私の方法によれば、政治上の問題においてはおよそ一般的な原則は定められないのだから、そこではあらゆることが、それらに係る諸国民の諸事情と精神とに即して考察されねばならない。」(I vii)

具体的には国民の精神や生活様式が重視されねばならない<sup>8)</sup>。それらの諸事情の「比較対照」が要請されるだろう。

「比較対照ということは、時にわれわれをして、さもなければ自分たちの考察から見逃されたかも知れない諸々の事情を気づかせるものである。」(II 258)

ステュアートは、以上のように個別状況を最大限重視する。したがってステュアートは、これを無視するフランス思想に見られる体系の精神を次のように厳しく批判している。

「政論家の中には、相互に複雑に結び付いていて1つの原理に還元しえない多くの問題を狭い範囲に閉じ込める方便なら何でも好む者がいる。」(III 182)

「複雑な性格をもつ主題を少数の一般原理のもとにまとめあげることは不可能であって、そうしようとすれば、多くの関連事項を都合よくこじつけて体系を作りあげるといふ、現代の悪弊に必ず陥ることになってしまう。」(III 195)

たとえ優れた分析であっても状況の多様性を無視すれはうまくはいかない。

「資質に恵まれ知識の豊かな人は、ほぼ間違ふことなく、どのような主題でも一貫して推論するものである。しかし、社会の錯綜した利害を研究するにあたっては、著者の才気煥発のためにかえって、状況の多様性に注意を払うことができなくなるのがよくあり、そのために彼の推論から引き出すことができるあらゆる結論を不確かなものにしてしまう。」(I xii)

「筆を進めるにしたがって、私の目に止まる国々や人々や物事に関するそれぞれの事情に不満を抱き、不機嫌になるのを感じた時には、およそ行政上の施策をとがめだてするのは危険であることに私はすぐに気がついた。というのも、こうした場合には、政治家が当面していたはずの諸事情の組み合わせのすべてに精通する必要があるからである。」(I vi)

以上のようなステュアートの状況・事情に関する強調は、新古典派経済学の完全情報の前提を批判したハイエク(Hayek (1976))の知識分業論の特定状況の知識・情報の重視を想起させるものがあるのではないだろうか<sup>9)</sup>。

さて確かに個別的な状況の分析は複雑で難解となるが、その効用は次のような点にある。

「あまりにも多くの個別的な関連事項が考慮に入れられると主題がずっと複雑になり、したがって推論だけで得られる帰結はあまり明確でなくなるにちがいない。しかし他方では、それは思考を開放し、やがて社会の利益のために利用されるかもしれないような多くの助言を与えてくれるのである。」(IV 16)

「政治的事実を語るだけの人は記憶力を鍛えるにすぎないのに対し、原理を演繹してそこから推論の連鎖を辿る人々は、洞察力を鍛える。小さな火花が巨大な炎を生じさせるように、貧弱な才能の持ち主の投げかけた暗示が、一国のあらゆる偉大な人々を全面的な改革と改善との計画に着手させるかもしれない。」(IV 16)

それではこの改革を担うステイツマンに要請されるものは何か。そこで問われるべきはステイツマンのアートである。

### ステイツマンのアート

ステュアートのポリティカル・エコノミーの科学は、前述のように政策科学であって、原理の演繹に止まらず、実践への方途を要請する。政策主体が問われるが、ステュアートの為政者論はまた別途検討することにして、ここではアートという概念に焦点をあててまとめて見ることにしよう。以下のように、アートの理念、調整のアートが問われるところとなる。

「経済というアートは、……まず、それが持っているさまざまな作用を国民の精神、生活様式、習慣あるいは慣習に適合させることにあり、そしてその後で、これらの諸事情を、一連の新しくいっそう有益な制度を導入することができるような形に調整していくことにある。」(I 3)

「私の観点は、この新しい経済の方式を生み出した諸事情を、ステイツマンがどのようにして人類のためにもっとも有利なものにできるかを研究することにある。」(I 90)

「偉大なアートとは、……状況に応じて施政を行うことであり、またそれを不変の諸原理にしたがって規制することである。」(II 231)

「この科学においては、大工が物差しを使うように、われわれは自分たちの原理を用いなければならない。この道具について大工は精通しているとしても、それでもなお自分の仕事に関して何事も正確に知りうるためには、彼はそれを使いこなさなければならない。」(II 240)

「もし主題が十分に理解されれば、有能な人々は、どんなに組み合わせが錯綜していても、正義に則ってこの偉大な操作を遂行できるだろう。」(II 396)

「巧みなアートというものは、……求めに応じられるように、手元にその科学の全体的見取り図を準備して、提案される事例にその原理のどれかがつねに適用できるようにしておくことである。」(III 61)

アートまで進んでしまったが、次に理論に戻ってステュアートが強調した経験との関係についてまとめていこう。

### 経験の重視

「人間の慎慮によっても予見できない事柄について教えてくれるのは経験だけである」(I 9)、「私は、経験がこれらの結論の真実であることを支持するものと確信する」(III 14)、「私は、ただ経験のみがこのことを解決できると考えている」(III 19)等というように、ステュアートにとって経験こそが試金石である。

「政治上の推論において最も大事なことは、関係を明確に指摘することであり、一般的な命題をもとに結論を引き出す場合にはできるだけ慎重に進むことであり、しかもなお経験と事実から目を離さぬことである。経験に照らし合わせてみて合致しないところが出てくることがあれば、これは九分九厘まで、われわれが



その組み合わせの中に入るべき何らかの事情を看過しているということである。」(Ⅱ 121)

「生まれつき思弁的な人間はいろいろなヒントを持ち出すものだが、実用に欠け経験の裏づけのない理論の力というものは、計画を形成するところまで彼らを導くにはいたらない。けれども偉大な天才は、権力と権威をもつならば、体系を案出してそれを首尾よく実行に移すためには、指示をするだけで十分なのである。」(Ⅰ 88)

「以上のことから、事実を正確に知ることがいかに重要であるか、また最高の理論といえども、同時にポリティカル・サイエンスを自家薬籠中のものにしていない人の手にかかると、いかに不完全極まるものにならざるをえないか、ということがわかる。」(Ⅲ 61)

「実情を把握することができれば、それによって推論を行なう確固たる基礎が作られ、理論を確立するのに役立つ。」(Ⅲ 21)

「そこでは事実にかかわるあのようによく多くの事情が組み合わされていたので、その理論から引き出されたいくつかの結論が経験によって証明されないかぎり、いささかでもそれに重きをおくべきでない。」(Ⅲ 14-15)

「どんな偉大な天才にとっても、理論的な諸帰結を明示するほどの力はない。こうした事柄に関するすべての知見は経験から生じ、すべての教訓はわれわれの注意と反省から生じる。」(Ⅳ 28)

なおある統計データの不備等に関して述べているから、この項目の中にあげておこう。

「問題の解決に必要なあらゆる資料がまったく当て推量の域を出ないような主題の場合には、どんな算定がなされようが大同小異である。」(Ⅰ 125)

「われわれが生きている時代に、このような比率を近似値で推測するほかないということは、何たる恥であることか。」(Ⅲ 100)

## 相対主義

ステュアートは「諸々の原理は、どんなに普遍的にあてはまるものであっても、国民の精神の側で十分な準備がなければ、実際にはまったく効果がないものになってしまう」(Ⅰ 3-4)、また「ポリティカル・エコノミーに関する科学の他のあらゆる分野と同じように、この分野においても、一般法則と呼べるようなものはほとんど規定しえない」(Ⅱ 79)と表明している。個別状況を重視し、経験を試金石とするステュアートは相対主義者といってよいだろう。以下のように多様性に留意すべしと説かれている。

「異なった国々に見られる、政治形態、法律、風土ならびに生活様式などの違いに起因する、財産の分配、諸階級の従属関係、国民の気質の相違を考えてみれば、各国の経済は必然的に異ならざるをえない。」(Ⅰ 3)

「人間は、あらゆる時代、あらゆる国、あらゆる風土において、すべて一様に利己心や、便宜や、義務あるいは情熱といった原理に依存している。この点におい

て人間はみなよく似ているが、他の点ではそうではない。」(I 7)

「どんな国でも多種多様な事情があるのだから、あらゆる組み合わせに対応できるように諸々の原理を結合する特殊な才能を持ち合わせていなければ、どんなに完全な理論が提出されるとしても、欠陥があるように思われるにちがいない。」

(I 110)

かくして以上のように演繹的科学と相対主義あるいは歴史主義の両側面を兼ね備えていたという点で、この経済学の創始者はスミスと同様であった。要するにまた経済科学の複雑性を明確に読み取っていたのである。

### 言語・観念・コミュニケーション

ステュアートは科学研究の遂行にあたってわれわれの認識と評価の主体としての人間の特性について随所で説いている。主として言語・観念・コミュニケーションの観点からまとめてみることにしよう。

まずは言語に関して次のように述べている。

「言語が……不完全であるために、われわれはしばしば言葉の上面の議論に巻き込まれる。」(I xii)

「もともとどんなに慎重な発言でも種々の曖昧さを伴わざるをえない。」(I xii-xiii)

「そんなことには注意せずに、われわれは、学校にいる時は勉強の大半を、そして世間という舞台に出てからは知識の大部分を、言語の濫用に費やしている。」(I xiii)

「学問のある者は、含みのある言い方を、機知のある者は紛らわしい言葉を好む。」(I xiii)

「一般に、われわれがしゃべったり書いたりする時には言葉に慣れすぎて、深く考えないために、観念の標識がその表現しようとしていた表象に取って代わっているのである。」(I xiii)

以上は一連の文章を分けてみたものである。かなり格言的効果が出ているのではないだろうか。

次に観念について。ステュアートによれば「思うに、命題が十分によく理解され、あらゆる利害関係者が同一の対象に同一の認識でこのような命題を適用していたとすれば、誰もがあらゆる命題に対して同じ見解を持つだろうということほど確実なことはない」(II 379) のであるが、なかなかこううまくいくものではない。ステュアートは単純な観念から複雑な観念へと進んでいくとコミュニケーションが困難となる次第を言語との結びつきから次のように述べている。

「正しい命題は、すべて理解された時には、広く同意を得られるはずである。これは、単純な観念がそれぞれ肯定されたり否定されたりする場合には、いつも妥当する。音が聞くものであること、あるいは黒が白でないことを疑う者はかつていなかった。だがよくあることだが、命題について議論が起こり、そこで複雑な観念が比較される場合には、当事者が互いに理解しあっていないと考えてさしつ

かえない。」(I xiii)

「人々の間の意見の相違は、……現実のものというよりはむしろわべだけのものだということがしばしばある。われわれが自分自身の諸観念を比較する時は、いつもその関係がはっきりとわかる。しかしその関係を他人に伝えようとする場合、自分の頭の中ですでにできあがっている観念の明確な組み合わせを十分に説明できる言葉で表現することが、時にはむずかしいのである。」(I xiv)

「言葉を用いるのは観念を説明するためであり、またどんな観念も、それが単純であれば、言葉でその観念を伝えることがそれだけ容易である。したがって、言語に同義語と呼ばれるいくつかの言葉が含まれている時には、われわれはつねに、それらの言葉によって伝えられる観念は単純でないと判断してもさしつかえない。こういう場合にはいつでも、そのような言葉をできるだけ同義語的なものでないようにし、それらの言葉によって伝えられる観念の間の独特な相違点を指摘することは、言語の発達のために貢献していることになる。」(I 410-411)

以下、全編にわたって見られる言語と観念に関するステュアートの文章をあげてみる。

「偽りの体系を見破る……最良の方法は、常に用語の代わりに定義を用いてみることである。」(I xii)

「人々は概して言葉にこだわって事実を見ない。」(II 142)

「われわれは、複雑な用語をある時はある1つの意味に、またある時には別の意味に置き換えて使いながら、その用語が確定的で明確な観念を表わしているかのように結論を引き出す。」(II 101)

「各人が同一の用語を異なった意味合いに用いているような時には、混乱はその極に達する。」(III 65)

「国民の考えが用語にしばられている場合には、用語の間の違いはかくも大きいのである。」(IV 298)

「眼前にある対象はあまりにも強烈な印象をあたえやすいものであって、記憶に頼ってしか思い出されない対象と公平に比較することができない。」(I xvi)

「われわれの観念をできるかぎり明晰なものにするためには、それを簡単なものにしておかなければならない。」(II 302)

「わかっていないことは自分たちにとって有害とは思えないものである。」(II 375)

「人というものは、各人が作り上げるそれぞれの観念の組み合わせに従って、そうなるはずだと思い込んで、とかく結論を引き出すものである。」(IV 201)

いま取りあげている項目は結果的に格言的に整理しやすかった。以上のようにかなり格言集の構成として魅力的になっているものと思うがどうだろうか。

## 偏見について

コミュニケーションの問題と関連してくるだろうが、ステュアートは人々の偏見についてよく言及しているから、これもいま別個にあげて見よう。

「人類に関するほとんどすべての事柄について人々が意見を異にするとしても、何の不思議もない。」(I 8)

「人間は理性よりも偏見によって支配されることが多い。」(II 148)

「理性や常識はいつの時代でも人々に受け入れられるわけではない。人間は気分や、またよくあることだが偏見の支配を免れない。」(II 317)

「人々があまりに狭い視野で政治的な事柄についての結論を下すと、どんなに誤りを重ねがちになるかということを、いまやわれわれは理解している。」(IV 163)

偏見とは少し違うだろうが、性急な判断の戒めとしてあげておこう。

「人々が結果だけを考えて、それを生み出した原因の結果を怠るならば、性急に不平を言ったり、また何もせずに運頼みをするようになってしまうのが通例である。われわれは自然的原因を追求することによってのみ、あらゆる利益の性質についてだけでなく、あらゆる弊害の性質についても、堅実な判断を形成する方法を手に入れることができる。」(II 140)

#### 文章について

文章に関しても別個にまとめるところができそうである。

「文章を書く者はみな不偏不党を誇るが、それは自分がその見せかけに気づいていないからである。」(I xv)

「自分の用向きのために書くという習慣を身につけている人ならば、誰でもふだんに使う文体は、言語をその研究対象にしている人や、文学的名声をえたいと願って文章を書く人よりもぞんざいであるに違いない。」(I ix)

「すべてこの種の著述においては、何よりも2つのことが求められる。第1には、抽象的だとされる観念を明瞭に、平易に、そして単純に表現することである。この作業は、鎖を構成する環を1つずつ鍛え上げるのに似ている。第2は、上の諸観念を正しい順序に、すなわちそれぞれの関係が最も直接的になるように配列することである。このような著述が優れた理解力の前に提示される時、記憶によって諸々の環が接合されて、作業は完成する。こうしてどれか1つの環を押さえておきさえすれば、残りの環全体はおのずと手繰られることになるわけである。」(I 218)

「ただ気づいているにすぎない人は、決して明瞭な記述をしないものだ。」(II 378)

さてステュアート自身の文章はというと明瞭な論証に向かって進むのはよいとしても実に繰り返しが多い。ひじょうに気にかかる点である。次にこの点を検討することにしよう。

#### 4. ステュアートの心性

ステュアートは「私の頻繁な繰り返し」(I 89)と自認するその通りに繰り返しが多い。上述の原理の演繹の諸説に見られるように、肝心要、主題ではあるのだが

類似の記述がたいへんに多い。多弁である。「ある程度の反復が避けられないだろう」(I 217), 「反復を」避けられない (I 219), 「多少の繰り返し」(II 268), 「反復を余儀なくされた」(II 338), 「蒸し返す」(III 10), 事例への原理の適用の弁明 (III 314-315), 繰り返しの弁明 (I 405, III 424) 等々。さらに各編の要約で繰り返しが増幅される。繰り返しの弁明すら繰り返されている。ステュアートの「熱中しやすい性分」(I vi) からそうなるのかどうかかわからないが、ここにステュアートの1つの心性をうかがうことができるだろう。そして繰り返しの効果については、何か積極的なことがいえるだろうか。論証の着実さ・慎重さ、銘記の効果といったところだろうか。

ステュアートの心性といったが、『経済の原理』を読んでいると、繰り返しのほかに研究者としての弁明が表明されており、これがまた気にかかってしまう。「私はどのような体系を構築しようとするものでもないが、人間の本性に合致し、互いに矛盾することのない一連の原理を追求することによって、立派な体系を作り上げるためのいくつかの材料を提供するように努める」(I 7), あるいは「私のこれまでの主要な意図は、世界のあらゆる時代に多かれ少なかれ定まった結果をもたらした事柄を研究することによって、現代政治の諸原理を検討するための道を開くことだった」(I 217) と謙虚さの表明と感心するが、一方力不足であると言っているものの、そう単純にとも思えないコンプレックスとも自負ともつかない(結局、両方だろうか) 取れる記述が随分と見られる。

ステュアートは自分の立場を絵画の制作によくたとえて表明している。自分の仕事は画家ではなく画家のための画布や絵具作りの仕事のようなものだとか、あるいは画家であるにしても自分はへばな画家であるという。すなわち自分の仕事を画布にたとえ「私がこの研究を公けにするのは、私よりもすぐれた人物が筆を加えるための画布としてこの小論が役立てばと思うからにほかならない」(I x), あるいは「私は自分の著作を私よりもすぐれた力量を持った人が腕をふるうために供する画布にすぎないと考えている」(I xviii) という。また「私の仕事は絵画用のいろいろな単色の絵の具を作るのに似ており、それを混ぜるのは画家の仕事である。私がせいぜいなしうと思っていることは、想定に依拠して論理的に推論することだけである。もしどんな時でも私がこれ以上に出過ぎることがあれば、それは私の計画を逸脱しているのであって、非は自分にある」(I 308)。このように自分の仕事を絵の具を作ることだと述べている。そして自分自身が画家であるとも述べるのだが、次のようになってしまう。これが有名な一節である。

「私がここで、自分をかの偉大なモンテスキューと同列において、「私だって絵描きだ」というコレッジョの言葉を借用しても、うぬぼれの誇りを受けることはないだろう。現に私もまた一人のへば絵描きである。」(I 89)

これらは格言集の編成に向かうのには直接つながりそうもない。こうした言説にはかかわらずに、さっさと排除していった方が効率的かもしれない。しかしいま方法論の項目としてまとめて見ると、科学なかんずく社会科学の形成に心性・スタイル・レトリック等が影響をあたえるケースを示唆しているように思えてならない。

つまりステュアートの心性・スタイル・レトリックが基調となって、ステュアートの科学を支えている。このようなステュアートの経過は古風として済ますよりも、科学のあり方について立ち止まって考える契機となるようにも思えてならない。

## 5. ステュアートの格言観

ステュアート自身の格言観はどうだろうか。これがまさに重要であると思う。冒頭に引用したようにステュアートは「格言はわれわれの観念の拡充を容易にするものである」とその効用を述べている。しかし面白いのは実はこれに続く文章である。それは「だから私はそれを放棄しなければならなくなった場合に、いつも決まって後悔の念にかられた」(I 78)となっている。後の方の文章もまたステュアートの神髄というべきではないだろうか。ステュアートのここでいう格言とは「国家の住民を増加せしめよ、一国の強さと力とはその住民の数に比例する」という「誰もが口にする一般的な格言」である。これに対してステュアートは「住民にとってはその数が増加することよりもむしろ仕事をきちんとあたえられることが必要である」という想定のもとに論証を進めている。

別の箇所でもステュアートはまた「思うに一般的命題には、いたるところに誤謬が潜んでいる」(I 100)とも述べている。この後の部分は面白いから引用してみよう。「人によれば、貧者の子どもは富者の子どもよりもよく育つと言う。そういうことがあるにしても、ふつうの道理から見ればそうであるはずはない。だが同じ人物があなたに言うだろう。私は息子を商人にしたが、あれは金持ちになるだろう、と。なぜだろうか。(AB)は商人であったが、無一文から始めて、10万ポンドを残して死んだからである。しかし(AB)に続いてアルファベットの文字をすべてたどり、彼同様に出発をした者を調べれば、その全員が破産して生涯を終えているかも知れない。」(I 100-101)

こう述べた後、格言1つ。ステュアートいわく「成功した者は目立つのだが、敗者の名は人の口には上らない」(I 101)。

この格言はともかく上述の体系批判とともに以上のようにステュアートには格言・格率の批判もあるわけである。要するにステュアートには「格言を尊重せよ」もあれば「格言を粉碎せよ」もある。すなわち逆転の発想もみられて柔軟である。ともかく格言を却下して別の新たな格言を作っているという結果になっているようにも思う。

ここで「一般的原理を演繹し終えた後で、雑多な問題にわたる1章をおくことは、……一般的原理の練習問題として役に立つ」(III 62)というステュアートの掣みに倣って、1章というほどではないがいま後者を演習的に少し考察してみることにしよう。例は経済学徒だから経済学文献からになる。

「急がば回れ」。そうではない。急ぐならやはり真直ぐ行くべし、正面突破に如くはない。ただし力がある。反動がある。しかし一時たりとも待つてはいられない。長期ではなく短期である。レトリシャン・ケインズは次のように述べた。

「長期的に見ると、われわれはみな死んでしまう。嵐の中であって、経済学者に  
いえることが、ただ嵐が遠く過ぎ去れば波はまた静まるであろう、ということだ  
けならば、彼らの仕事は他愛なく無用である。」(Keynes (1971) 65)

おなじみ有名な古典派の貨幣数量説命題批判の一節である。短期の財政政策にはし  
かし周知の財政赤字問題という反動がある。

「失敗は成功のもと」である。やはりレトリシャン・ケインズの例で考えてみる。  
『一般理論』第24章「社会哲学」(Keynes (1973))の思想に関する有名な一節であ  
る<sup>10)</sup>。「失敗は成功のもと」であるが、ケインズの文章をヒントに考えると、しか  
し一方で「成功は失敗のもと」である。現在の問題解決にあたって、ひとはそのヒ  
ントをよく経験や過去の成功例に求めようとする。しかし現在の状況・事態に対処  
するのに過去の成功例をよりどころとするところに不幸・悲劇がある。現在のかつ  
てなかった事態にはそれは少なくともそのままではもはや適用できないのである。  
かくして「成功は失敗のもと」でもある。

## 6. いわゆる格言についての若干の考察

最後に格言集について考察を加えてみたい。格言集というものは、人類の知的遺  
産・古典の知恵であり、プラグマティックなものであるが、それだけでは当然なが  
ら原作・著者に関する十分な知識が得られるものではない。それを得るためには原  
作や伝記などの資料を別途に求めなければならない。古典等の格言集を「汲めども  
尽きぬ源泉」といえば、深遠さを示唆するが、著者の意図を離れた読解の推奨を  
含意しているとまではいえないかもしれないが、時にはどこか無頓着な場合もある  
のかもしれない。

読書には多様な読解の仕方があるだろう。しかしここでとりあえず読者の権利を  
どこまでも主張しようというのではない。さらには「偉大なる誤読」もよしとプ  
ラグマティックな読み方をそう強く推奨しているわけでもない。このように格言読み  
は文脈・著者の意図を離れる懸念がある。あるいは読者固有のレンズが強ければ、  
文脈・著者の意図が閑却されるというような懸念があるとも考えることもできるだ  
ろう。格言を読むということをもう少し考えてみよう。

まず格言的読み方をするということは、『経済の原理』をステュアートの伝記  
的・歴史的・思想形成史的読解とは離れて読んでみるということである。その内容  
に古典的意義があるならば、翻って著者ステュアートの意義を認める間接的に肯定  
的に評価することにつながるだろう。格言的読解は伝記的・歴史的ではないが、し  
かしまたさりとてそれほど理論的読解ということでもないだろう。そうすると直感  
的・感性的・経験的ということになるが、それもまた大きな意義があるということ  
である。伝記的読解でも理論的読解でもない。理論的読み方であるにしても相当に  
狭い読み方というべきだろうか。あるいは逆に広い読み方であるというべきだろ  
うか。格言に着目することは、先に示唆したように、そもそも読者がその権利とし  
てテキストを離れて要素のみで創造的な何か生産があるという方向、プラグマティッ

クな読み方を肯定している含みがあるだろう。換骨脱胎もあればそうではないケースもあるだろう。いずれにしても格言読みは過剰解釈であり過少解釈でもある。文脈を無視してあるいは軽視して当該格言をヒントに「観念の拡充」をするのは過剰解釈につながるだろう。プラグマティストは当然に気にしないだろう。一方、文脈を無視することはテキストの読解としては過少解釈ということにもなるだろう。いずれにしても古典としてのテキストの尊重であるのかどうか。いずれの読み方にせよ組上に乗せるのだから少なくとも1回は尊重しているつもりではあるだろう。

われわれは、いわゆる格言集ではなく、文学書であれ学術書であれストーリーもしくはストーリー性のある著作から格言を抽出している。その格言は文脈・ストーリーの中に埋め込まれているわけだが、それは著者が意図的であれ（意図的である作家ほどそれが多くなる傾向があるだろうが、何か実証的に調べてみないと断定はできないが）、さもなくば筆の運びで無意識であれ、個別状況から普遍的な事柄を訴えることになる。それはテキストが開かれているということだろうか。つまりその事柄に関して読者に共通理解を求めているということもあるかもしれないが、読者が勝手に（というより読者の権利として）たとえばある作中のせりふを格言化してしまうということもあるだろう。

ここで格言読みのメリットとデメリットについていくつかの例から考えてみよう。たとえば先のケインズ『一般理論』（Keynes 1972）の掉美を飾る有名な既得権と思想の関係に関する文章は、必ずしもその文脈にこだわらずよく引用され解釈されてきた。その文章の含蓄がそうさせたのかもしれない。もちろんケインズのこの文章の読解に過剰解釈の懸念がないわけではないだろう。

今日、広く流布したアルフレッド・マーシャル（Marshall (1925)）の有名な言葉 cool heads, but warm hearts を考えてみよう<sup>11)</sup>。この言葉は、マーシャルのケンブリッジのエリート学生に向かって発せられた社会的苦悩と格闘するノブレスオブリージュ的勸奨であった。この言葉は広く流布している。まずもって私もそのような有為な学生を育てたいと教師がマーシャルを引用して決意表明しているならまさに適切だろう。しかしこれが対人関係の処世訓になったり、スポーツの試合に臨むモットーになるとどうなのだろうか。それで成功したり勝利したりするという効果は考えられるわけである。あるいは逆にレイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説（Chandler (1992)）の有名な hard と gentle のせりふ<sup>12)</sup> が社会科学的・経済学的文脈に持ち込まれて引用されたりする。それも効果はあるだろうが、原作は男女間の会話である。ステュアートのいうように言語の濫用といってよいと思う。それとも濫用 (abuse) ではなく行使 (use) なのだろうか。

しかしいまこうした問題は格言集にはつきまとう問題であることをひとまず了解しておこう。もちろんこれで十分というわけではまったくないが、当面、そのような形でかまわない。ステュアートが広く読まれることを期待したいからである。

流布した格言をその原作を知らずに先にわれわれが知っている状況がある。名のみ知られて読まれざる書という古典の1つの特徴があるだろうが、ある古典に関する予備知識や先入見には実際に読む時の効用があるようにも思う。いわゆる「本は



読んで見なければわからない」という意外さが読書の面白さであるが、そのような効用はあるだろう。つまり、いまステュアートに関する先入観が形成されていてもかまわない。むしろ本稿は先入観の形成に裨差することになるだろう。何しろ知られていないのだから。ステュアート『経済の原理』の啓蒙の提唱の趣旨からこのような戦略の要請も当面は正当化されるものとひとまずは考えて、ご寛恕をこう次第である。

#### 注

- 1) ステュアートの『経済の原理』の引用は、1805年著作集版リプリント版により、巻数と頁数を記す。訳文は、文脈上、若干手を加えている場合があります。ご容赦ください。
- 2) ステュアートの経済的自由主義については竹本(1995)、大森(1996)、大森(2005)、渡辺(2007)等の諸研究から学んだ。本稿のステュアート理解に際して多くを学んだ。
- 3) 最新訳に関しては坂本(2007)を参照されたい。
- 4) 伝記に関しては1805年全集版の第6巻所収の伝記(Anon(1995)), Skinner(1998)、竹本(1993)、小林(1993b)、渡辺(2007)等を参照。
- 5) さしあたって、ステュアートの方法論に関しては、大森(1996)第1章、Kobayashi(1998)等から学んだ。
- 6) ステュアートの『経済の原理』には神学的・形而上学的・哲学的議論も垣間見ることができる。筆者の一番の関心であるが、それは晩年の著作(Steuart(1995b))に見られる関心と合わせて別途検討することにしたい。
- 7) ポリティカル・エコノミーの詳細な語源的考察については、竹本(1998)を参照。
- 8) 以下でも国民の精神という概念が出てくるが、ステュアートの放浪の大陸生活における思想形成という伝記的アプローチと合わせて別途検討することにしたい。
- 9) この点に関しては、いま示唆として詳細な検討は次の機会に取り組んでみたい。
- 10) 念のために引用しておこう。以下の有名な文章である。「経済学者や政治哲学者の思想は、それが正しい場合にも誤っている場合にも、それ以外にはない。どのような知的影響とも無縁であると自ら信じている実務家も、過去のある経済学者の奴隷であるのがふつうである。権力の座にあって天の声を聞くと称する狂人も、数年前のある三文学者から狂気の考えを引き出している。私は、既得権益の力は、思想の漸次的な浸透力に比べて著しく誇張されていると思う。もちろん思想の浸透は、直ちにではなく、ある時間をおいた後に行なわれるものである。なぜなら、経済哲学と政治哲学の分野では、25ないし30歳以後になって、新しい理論の影響を受ける人は多くはなく、したがって官僚や政治家やさらには煽動家でさえも、現在の事態に適用する思想はおそらく最新のものではないからである。しかし、遅かれ早かれ、良かれ悪しかれ危険なものは、既得権益ではなくて思想である。」(Keynes(1973) 384-5)。この文章の解釈に関して拙稿(坂本(2008))を参照されたい。
- 11) これも原文を引用しておこう。以下の通りである。「私が、もっとも深く心に期し、またそのためにもっとも大きな努力を払いたいと思っておりますことは、冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心情をもって (cool heads, but warm hearts), すぐれた人々の母で

ありますケンブリッジで学ぶ人々の間から、ますます多くの人々が、私たちの周囲の社会的な苦難を打開するために、私たちの持っている最良の力の少なくとも一部を喜んで提供し、さらにまた、洗練された高貴な生活に必要な物的手段をすべての人が利用できるようにすることがどこまで可能であるかを見出すために、私たちにできますことを、なし終えるまでは安堵せずと決意して、学窓を出て行きますように、私の才能は貧しく、力もかぎられてはおりますが、私にできるかぎりのことをしたいという願いにほかなりません。」(Marshall (1925) 174)。マーシャルのケンブリッジ大学教授就任講義「経済学の現状」の最後の一節である。この文章全体も有名ではあるが、前述のケインズの文章ほど知られてはいないだろう。

- 12) 原文は次のようになっている。If I wasn't hard, I wouldn't be alive, If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive. Chandler (1988) 153.

### 参考文献

- Anon. 1995b. Anecdotes of the life of Sir James Steuart, Bart. in Steuart (1995b). 中野正訳(1)所収。
- Chandler, Raymond. 1988 [1958]. *Playback*. New York: Vintage Books.
- Hayek, F. A. 1976 [1945]. *Individualism and Economic Order*. London: Routledge & Kegan Paul. 嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』(ハイエク全集第3巻) 春秋社, 1990年。
- 平井俊顕. 2007『ケインズ100の名言』東洋経済新報社。
- Keynes, John Maynard. 1971 [1923]. *A Tract on Monetary Reform*. Volume 4 of *The Collected Works of John Maynard Keynes*. London: Macmillan/Cambridge University Press. 中内恒夫訳『貨幣改革論』(ケインズ全集第4巻) 東洋経済新報社, 1978年。
- Keynes, John Maynard. 1973 [1936]. *The General Theory of Employment, Interest and Money*. Volume 7 of *The Collected Works of John Maynard Keynes*. London: Macmillan/Cambridge University Press. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』(ケインズ全集第7巻) 東洋経済新報社, 1983年。間宮陽介訳『雇用, 利子および貨幣の一般理論』全2冊, 岩波文庫, 2008年。
- 小林昇. 1993a「監訳者まえがき」J. ステュアート, 小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』所収, i-iv頁, 名古屋大学出版会。
- 小林昇. 1993b「忘れられた古典—サー・ジェイムズ・ステュアート『経済の原理』について」J. ステュアート, 小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』別冊, 名古屋大学出版会。
- Kobayashi, Noboru. 1998. Introduction, Section2: The First System of Political Economy. in A. S. Skinner ed. with N. Kobayashi & H. Mizuta. *An Inquiry into the Principle of Political Economy by Sir James Steuart*. vol. 1. London: Pickering & Chatto.
- Marshall, Alfred. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*. Pigou, Arthur Cecil (ed.) London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済論文集』全4冊, 岩波ブックセンター, 1988年。
- 大森郁夫. 1996『ステュアートとスミス—「巧妙な手」と「見えざる手」の経済理論』

ミネルヴァ書房。

- 大森郁夫. 2005「サー・ジェイムズ・ステュアート—経済学はいかなる意味で〈ステイツマンのアート〉なのか?—」鈴木信雄編『経済思想④経済学の古典的世界1』所収, 1-48頁, 日本経済評論社。
- 坂本幹雄. 2002『経済学史』創価大学出版会。
- 坂本幹雄. 2007「ブック・スクウェア アダム・スミス著 山岡洋一訳『国富論』」『学光』第32巻第7号(11月号)所収, 31-35頁, 創価大学通信教育部。
- 坂本幹雄. 2008「ブック・スクウェア ケインズ著 間宮陽介訳『雇用, 利子および貨幣の一般理論』」『学光』第33巻第8号(11月号)所収, 19-24頁, 創価大学通信教育部。
- 坂本幹雄. 2009『経済学史』(新版)創価大学通信教育部。
- Skinner, A. S. 1998. Introduction, Section1: Biographical. in A. S. Skinner ed. with N. Kobayashi & H. Mizuta. *An Inquiry into the Principle of Political Economy by Sir James Steuart*. vol. 1. London: Pickering & Chatto.
- Steuart, James. 1995a. *An Inquiry into the Principle of Political Economy: Being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations. In which are particularly considered Population, Agriculture, Trade, Industry, Money, Coin, Interest, Circulation, Banks, Exchange, Public Credit, and Taxes. 2vols. London. 1767. in The Works, Political, Metaphysical, and Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart. Now First Collected by General Sir James Steuart, Bart. his Son, From his Father's Corrected Copies. To which are Subjoined Anecdotes of the Author.* Vol. I-IV, London. 1805. Reprinted. *Collected Works of James Steuart*. London: Routledge/Thoemmes Press. 小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』名古屋大学出版会, 1993年。小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第1・第2編—』名古屋大学出版会。中野正訳『経済学原理』第1篇・第2篇, (1)-(3), 岩波文庫, 1967, 78, 80年。加藤一夫訳『経済学原理』第1編・第2編上下, 東京大学出版会, 1980, 81, 82年。
- Steuart, James. 1995b. *The Works, Political, Metaphysical, and Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart. Now First Collected by General Sir James Steuart, Bart. his Son, From his Father's Corrected Copies. To which are Subjoined Anecdotes of the Author.* Vol. VI, London. 1805. Reprinted. *Collected Works of James Steuart*. London: Routledge/Thoemmes Press.
- 竹本洋. 1995『経済学体系の創生—ジェイムズ・ステュアート研究—』名古屋大学出版会。
- 竹本洋. 1993「訳者解説」J. ステュアート, 小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』所収, 845—871頁, 名古屋大学出版会。
- 竹本洋. 1998「訳者解説」J. ステュアート, 小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第1・第2編—』所収 599—657頁, 名古屋大学出版会。
- 渡辺邦博. 2007『ジェイムズ・ステュアートとスコットランド—もうひとつの古典派経済学』ミネルヴァ書房。